プロティノスのエネアデス
「プロティノスの第一の善とその他の善について」I-7-(54)

訳注における著者名のない引用はプラトンの著書である

適宜、自分なりの注を加えてあるので、オレンジ色で示すことにする

死は否定されていない

1
はたして人は、生命の自然本来の活動以外のものを、それぞれのものにとっての善であると、言うことができるであろうか

またもし或るものが多くの部分から成っているならば、<それのよりよい部分に固有で、自然に合致し、決して尽きることのない活動>が、その或るものにとっての善であると言えるのではなかろうか(アリストテレス『ニコマス倫理学』I8,1098b)

魂の活動こそが、その魂にとっての自然本来の善であることになるだろう。しかし、もしその魂が最善なる魂であって、それの活動が最善なるものに向けられているのであれば、その最善なるものはたんにその魂にとっての善であるばかりでなく、端的に<善>でもあるだろう

それゆえ、もし或るものが「<諸存在のうちの最善なるもの>であり、<諸存在を超えたかなたにあるもの>(『国家』VI509b9)>であるから、他に向かって活動することをせず、他のものがそれに向かって活動する」のであれば、明らかに、その或るものこそ<善>であり、他の諸存在が善にあずかることができるのも、その<善>ゆえにであることになるだろう

なお、他の諸存在――すなわち、右に述べたような仕方で善をもつものの――は二通りの仕方で、つまり、「その<善>に類似すること」と「その<善>に向かって活動すること」によって善をもつのである

それゆえ、もし最善なるものへの欲求と活動が善であれば、<善>は他のものに目を向けることもなければ他のものを欲求することもなく、ただただ静かにとどまっている「泉」であり、自然的諸活動の「源」であって(『パイドロス』245c9)他のものに活動を向けることなしに

――なぜなら、他のものがそれに向かって活動するのであるから――

他のものを<善の形相をもったもの>たらしめる「泉」であり、「源」であることになる

すなわち、この「源」としての<善>は、活動によって善であるのでもなければ直知の働きによって善であるのでもなく、ただただ自己自身にとどまっていること、そのことゆえに善なのである

なぜなら、それは、真実在を超えたかなたにあるものであるがゆえに活動を超え、知性や直知の働きを超えて、そのかなたにあるからである

それにまた、<すべてはそれに依存するけれども、それ自体はいかなるものにも依存することのないもの>をこそ、われわれは<善>としなければならないからである

なぜなら、<善>をそのようなものとみなすことによってのみ、「すべてがそれを欲し求めるもの」という定義(アリストテレス『ニコマコス倫理学』I1,1094a3)も真となるからである

それゆえ、すべては<善>へと向きをかえるが、<善>は静かにとどまっているのでなければならないのであって、それは、すべての半径の源たる中心に対する、円周の関係に似ているのである

それにまた太陽も例としてあげることができよう。すなわち、太陽は光に対する中心のようなものであって、この太陽から発する光は太陽に依存しているのである。とにかく、光はたとえどこにあろうと、太陽とともにあり、太陽から切り離されることはないからであって、たとえ君が光を別の方へ切り離そうとしても、光は太陽の方を向いているのである

2
だが、他のものはすべて、どのような仕方で<善>の方を向いているのであろうか

魂のないものは魂の方を向き、魂は知性を通して<善>の方を向いているのである。しかし、魂のないものも、そのそれぞれが或る意味では一つであり、或る意味では存在なのであるから、<善>の一部を持っているのである

それに、魂のないものも、形相にあずかっているのである。それゆえ、魂のないものは、「一や存在や形相にあずかっている」という意味で<善>にもあずかっているのである

してみると、魂のないものは、影像にあずかっていることになる。なぜなら、魂のないものが分有しているのは、存在や一の影であり、形相も、同様に影だからである

だが、これに対して、魂の生すなわち知性につづく第一位の魂の生は、真実により近いところに位置を占め、それは知性を通して<善の形相>をもつのである

もっとも、それは<善>を観ることができれば、<善>をもつことができるのだろう。しかし<善>の彼には知性があるのである

してみると、生をもっているものにとっては、生命が善であり、知性にあずかっているものにとっては、知性が善であることになるであろう。したがって、生命と知性をもっているものにとっては、<善>への道も二通りあることになるであろう

3
だが、もし生命が善きものであれば、生あるもののすべてが、その善きものをもっているのであろうか。いや、そうではない。劣悪な人の生命は不具で、はっきりと見ない人の眼のようなものである。なぜなら、その眼は自らの機能をはたしていないからである

では、もしわれわれの生が――その生には劣悪なものが混じり合っているのだが――善きものであれば、どうして死が悪しきものでないことがあろうか

その死は、いったいだれにとって、悪しきものなのであろうか。悪しきものは、必ず或るものに生じるのでなければならないのである

――しかし、悪しきものは、<もはや存在していても生命を欠いているもの>には生じないのである。だから石にも、悪しきことは生じないのである――

だが、もし死後も生命や魂が存続するとすれば、その魂はそれ自体に、自らの機能を高度に発揮するのであるから、それだけ善きものであることになるであろう

それに、その魂が全霊の一部となれば、そこに居を占めているその魂に、どんな悪しきものが生じるのであろうか

要するに、神々には善きことこそあれ、悪しきことは何もないように、自己の純粋清浄さを保っている魂にも、悪しきことは生じないのである

だが、魂が純粋さを保っていなくても、死はその魂にとって悪しきものではないであろう。生こそ悪しきものなのである。それに、たとえ魂が冥府において罰を受けることがあっても、やはりそこでも、その魂にとっては、生こそが悪しきものなのである。なぜなら、その生は、純粋な生ではないからである

しかしながら、もし魂と肉体の結合が生で、両者の分離が死であれば、魂は生と死の両方を受容しうるものであることになる。しかし、もし生が善きものであれば、どうして死は悪しきものではないのだろうか

善き生をもっている人びとにとっては、むろん、生は善きものである。ただし、その生は、それが魂と肉体との結合である限りにおいて善きものであるのではなく、徳でもって劣悪なものを寄せつけないからこそ、善きものなのである

だが、これに対して、死はもっと善きものなのである。いや、むしろ、われわれは、「肉体のなかにある生は、それ自体が劣悪なものであるけれども、魂が<合成されたもの>の生をおくらずに、この世においてであっても、自己自身を肉体から分離する場合には、その魂は徳ゆえに善きものとなる」と言うべきであろう